

令和3年度「学術変革領域研究（A）」新規採択研究領域  
に係る研究概要・審査結果の所見

領域番号	21A101	領域略称名	当事者化行動科学
研究領域名	「当事者化」人間行動科学：相互作用する個体脳と世界の法則性と物語性の理解		
領域代表者名 (所属等)	笠井 清登（東京大学・医学部附属病院・教授）		

（応募領域の研究概要）

認知科学は人間の認知行動と脳基盤を、社会を所与の定数として分析してきた。しかし予測困難で一回性の現実世界と切実に向き合う人間の当事者性を扱うには、個体脳 世界相互作用を組み込んだ学術変革が必要である。身体や認知特性の多数派にとって予測しやすいよう作られた世界にマッチしない少数派特性に苦悩する人々は、当事者研究により自らの持つ法則性 / 物語性と世界のそれらとの不一致に気づくことが回復への緒であるという知を生み出した。これに学び本提案は、学者自身の当事者化と少数派特性を持つユーザー研究者との共同創造、および大集団科学と脳行動科学を融合する学術変革により、相互作用する個体脳と世界の法則性と物語性の理解に基づき人間の当事者化の思春期発達過程と機構を解明する。

（審査結果の所見）

本研究領域は、身体障害や発達障害などの当事者が主体的に参与する当事者研究を更に発展させて、広く少数派特性を持つ人が抱える予測不能で困難な問題への対処を「当事者化」としてとらえ、法則性と物語性の二つの観点から解き明かそうとするものであり、新しい研究領域の形成が期待される。また、先行する新学術領域研究(2011年～2015年「自己制御精神」及び2016年～2020年「思春期主体価値」)の発展的展開としても妥当な方向性と研究内容を含んでいる。

本研究領域では「当事者化」について、人間が予測困難な現実世界に生きる上で、世界の特性と個人の特性の適合・不適合の問題に対処していく際に法則性と物語性を見出し内在化する認知過程と定義している。ただし、法則性は自然科学のもので、物語性は人文社会科学のものと二分法的に規定するのではなく、有機的に融合する視点が求められる。

また、個々の計画研究においては、内容及び参加研究者の研究遂行能力は優れているが、「当事者化」研究の発展に資するように研究領域全体の研究内容の整合を図ることが最も重要である。本研究領域の核とも言うべき当事者研究は高い評価を得ているが、それを「当事者化」の研究に着実に発展させていくことが望まれる。既存の「東京ティーンコホート」を活用した思春期発達研究が重要な柱とされるが、より幅広い発達の観点からのアプローチも望まれる。